

永和九年

えいわ

きゆうねん

永和九年、歳は癸丑に在り。

永和九年（三三）、癸丑の歳、

歳は癸丑に在り

とし

きしゅう

みすのとし

かいけい

さんいん

の

暮春之初

ぼしゆん

の

はじ

會稽山陰之

暮春の初め、會稽山陰の蘭亭に会す。

禊事を脩むるなり。

三月の初め、會稽山陰の蘭亭に集つたのは、禊を行なうためである。

蘭亭に會す

らんてい

かい

禊事を脩むる

けいじ

おさ

群賢畢至

なり

ぐんけん

いっしょ

く至り少長

いた

しやうちやう

群賢畢く至り、少長咸な集まる。

立派な人たちはすべて至り、老いも若きもみな集つた。

咸な集まる

み

あつ

こ

ち

すうざん

しゆんれい

此地

此地 崇山峻嶺、茂林脩竹有り、

崇山峻嶺

茂林脩竹有り又た清流激

もりん

しゆうちく

あ

ま

せいりゆう

げき

※修りなかい

この地には、高い山けわしい峰、茂った林と長い竹とがあり、

又た清流激湍有りて、左右に映帯す。

湍有りて左右に映帯す

たん

あ

さゆう

えいたい

※湍＝早瀬

その上にきれいな流れと早瀬とは、あたりに照り映えている。

※映＝映の俗字

引いて流觴曲水を為し

引いて以て流觴曲水を為し、其の次に列坐す。

※觴＝さかずき・酒杯
それを引いて杯を流す曲水をつくり、人びとは順次に並んで坐った。

其の次に列坐す
絲竹管弦

絲竹管弦の盛無しと雖も、
竹と糸の、管絃の華やかさはないとはいえ、

之盛無しと雖も
一觴一詠

一觴一詠、一杯の酒に一首の詩は、

とたいて幽情を暢叙するに

亦た以て幽情を暢叙するに足る。また秘められた感情をのびやかに表わすのに充分である。

是の日は天朗らかに氣

是の日や、天朗らかに氣清み。この日は、空は晴れ大氣はすみ、

清み惠風和暢す
仰いで宇

惠風和暢す。恵みの風はやわらかに吹きわたっている。

宙之大を觀俯して品類之

仰いで宇宙の大を觀、俯して品類の盛んなるを察す。

広大な宇宙を仰ぎ見、盛んな万物を見下ろして察する

盛んなるを察す

所以

ゆえ

に目

め

を遊

あそ

ばしめ

懐

おもい

を

騁

は

※馳と同字

所以に目を遊ばしめ懐を騁せ、

それゆえ気ままに眺め思いを馳せ、

以て

もつ

て

視聴

しちよう

之

娛

の

たの

しみを

極

きわ

むる

極

以て視聴の娛しみを極むるに足れり。

そうすることて充分に目と耳の娛しみをつくすのは、

に

足

た

れり

信

まこと

に樂

たの

しむ可

べ

き也

なり

そ

夫

ひと

人之相

い興

に一世

に

俯

ふ

夫れ人の相い与に一世に俯仰するや、

そもそも人は互いにこの世の中で暮らしてゆくにも、

ぎよう

ある

これ

かいほう

仰

するや

或

いは

諸を

懷抱

に

と

取

って

一室之内

に悟言

し

或

ある

いつしつ

の

ご

げん

一室の内に悟言し、一室の中で語りあい、

いは

寄

よ

せて

託

たく

する

所に

因

って

因

或いは寄せて託する所に因って、

ある者は好むところに従って、

けいがい

骨

の

そと

ほうろう

形骸之外

に

放浪

す

形骸の外に放浪す。

肉体の外に自由に振る舞う。

趣舎しゆしゃ進むことと止まること。
趣舎ばんしゆ

趣舎万殊しゆせんばんしゆにして

にして

静躁せいそう

同おな

じ

趣舎万殊しゆせんばんしゆにして、

行為は無限に異なり、

静躁同じからずと雖も、

動静も同じではないとはいえず、

いえず

そ

あ

ところ

よろこ

からずと

難いえず

も

其の

遇

う

所

に

欣

に

其の遇う所に欣び、

その境遇を喜び、

しづら

おの

う

あ

び軽

く

己

れに

得

るに

當

た

つては

慙く己れに得るに当たっては、

しばし自分の意のままになる場合は、

おうぜん

みずか

た

おい

の

まろ

快然

として

自

ら

乏

り

老

之

将

に

快然として自ら足り、

気持ちよく満足して、

いた

不

至

ら

んと

するを

知

らず

其

の

之

く

其

の

之

老の将に至らんとするを知らず。

老年が近づいてくるのも気づかない。

其の之く所既に倦み、

ところ

すで

う

じよう

い

したが

所

既に

倦

み

情

は

事

に

随

いて

そのゆきつくところにあきてくると、

情は事に随いて遷るに及んで、

感情は対象に従って移ろい、

うつ

およ

かん

がい

これ

かか

遷

るに

及

んで

感慨

に

係

之

に

係

感慨かんがい之これに係かかわれり。

感慨もそれにつれて変わってしまう。

われり

向欣

の

欣ぶ

ところ

所は

ところ

俛仰

ふぎよう

之間

の

俛仰

すで

之間

の

之間

すで

之間

すで

之間

すで

之間

すで

之間

すで

之間

すで

向の欣ぶ所は、俛仰の間、以に陳迹と為るも、

ちんせき

陳迹

と

為

る

も

猶

お

之

を

以

て

以前の喜びは、みるみるうちに過去の跡となってしまうが、

猶お之を以て懷を興さざる能わず。

おもい

おこ

あた

いわ

しゅう

懷

を

興

さ

ざる

能

わ

ず

況

ん

や

脩

なおそれでさえも心を動かさずにはおれないのである。

況んや脩短は化に随い、まして命の長短は物の変化に従い、

たん

か

したが

つい

つ

短

は

化

に

随

い

終

に

盡

くる

に

終に尽くるに期するをや。

き

こ

じん

い

しせい

ま

期

する

を

や

古

人

云

う

死

生

も

と

ついに尽きることになってしまっているのである。

古人云う、死生も亦た大なりと。

昔の人も、生と死はやはり大

切なことだといったが、

だい

あ

いた

た

大

なり

と

豈

に

痛

まし

から

ず

や

つね

せき

じん

こう

かん

の

よし

を

攬

る

毎

に

昔

人

興

感

之

由

を

攬

る

毎に昔人興感の由を攬るに、

昔の人が感慨をもよおした理由を見るたびに、

いつけい

がつ

いっ

に

一

契

を

合

する

が

若

し

一契を合するが若し。

それが割り符を合わせたように同じであれば、

未だ嘗て文に臨んで嗟悼

未だ嘗て文に臨んで嗟悼せずんば

その文を見るたびに歎き悼まずにはおれないが、

せずんばあらず之を懷に喻す

之を懷に喻す能わず。

それを心にさとすることができない。

能わず固より死生を一にするは

固より死生を一にするは虚誕たり、もとより死と生を同一視するのはいつわりであり、

虚誕たり彭殤を齊しくするは

彭祖と若死にの者をひとしくするものも、
彭祖を齊しくするは妄作たるを知る。
※彭祖Ⅱ殷時代の王で七百年生きたとされ、長寿の代表。
てたらめであるとは知っているものの、

妄作たるを知る後之今を視

後の今を視るも、
後の人が今の我われを見るのも、

るも亦た由お今之昔を視るが

亦た由お今の昔を視るがごとし。
また今の我われが昔を見るようであるとは、

ごとし悲しいかな故に時人を

悲しいかな。
悲しいことである。

故に時人を列叙し、
それゆえこのとき集った人びとの名を列記し、

列叙し其の述ぶる所を録し

其の述ぶる所を録し、
彼らが述べたところを書きとめておく。

世殊

よ
こと

なり
事異

こと
こと

なると
雖も

いふ
も

世殊なり事異なると雖も、

世が異なり事が変わっても、

懷

おもい

を興

おこ

す所以

ゆえん

は其

そ

の致

ち

は

懷を興す所以は、其の致は一なり。

思いを発する理由は、結局、同じであろうから。

一

いつ

なり也

いふ

後之攬

のち

の

み

る者

もの

二

ま

た將

まさ

に斯

そ

の文

に感

かん

ずる有

あ

らんとす

於

後の攬る者、亦た將に斯の文に感ずる有らんとす。

後世の見る人も、またこの文章に心を動かそうとすることであろう。

蘭

亭

叙